

## 資料紹介

中京大学図書館蔵

### 六百番歌合・六家抄

後藤重郎  
高橋万希子  
村井俊司

### 六百番歌合

四冊。室町中期写。縦二四・一糎、横一八〇糎。料紙には色変りの鳥の子を用い、金銀泥にて草花の下絵を描く。列帖装。表紙は紺紙に金泥にて蔓草に花模様を描き、題簽は「六百番歌合 第一(二〜四)」と記したものを表紙左上に貼布(写真一)。見返しは金箔に麻紋つなぎ、丸に龍の文様を配す。紙数は第一冊九十葉(墨付八十五葉)、第二冊以下順に八十八(八十五)、八十六(七十九)、九十八(九十五)葉。每半葉十行、一首一行書き。第一冊作者・春上・夏下、第二冊秋上・冬下、第三冊恋一・五、第四冊恋六・十、及び判者・女房の歌一首、左方右方各作者各部立

別にて勝持負の歌数並びに勝持負の総歌数、左方右方の勝持負の総歌数を記す。墨付最終葉の表に「私云此歌合者建久四年秋ト云々拾遺愚草ニ／云尔 私云釋阿判者于時八十歳云也」と記す。桐箱に納められているが、これは本来のものではなく別のものを使用する。寸法は縦二八・八糎、横二一・〇糎、高さ八・〇糎、蓋の高さ〇・八糎にて紫紐が付く。

第一冊第二葉裏から次のように記されている。

左

女房

従三位藤原朝臣季経

正四位下行左近衛権中将藤原朝臣兼宗

従四位上藤原朝臣有家

従四位下行左近衛権少将藤原朝臣定家

阿闍梨顯昭

右

従二位行左近衛権中将兼中宮権大夫藤原朝臣家房

従三位藤原朝臣経家

正四位下右京権大夫藤原朝臣隆信

従五位上藤原朝臣家隆



一、六百番歌合 表紙

従二位(ツタ)下源朝臣信定

寂蓮

講師

読師

左后(サマ)往事雌雄判者猶定勝負

判者

入道正三位皇太后宮大夫俊成 法名釈阿

(以上写真二)

春上題

元日宴 餘寒 春氷 若草 賭射

左大将家百首歌合

一番 元日宴

左持

女房

あら玉の年を雲井にむかふとてけふもろ人のみき給ふ也

右

従二位(ツタ)信定

百敷や春をむかふる盃に君か千年の影そうつれる

(判詞略)

と、このように続いていく(写真三・四・五)。これを小西甚一編著『新校六百番歌合』(有精堂 昭和五十一年)で見ると次のようである。

百首歌合 左大将家 後京極殿 建久四年

題

春十五首

元日宴 余寒 春水 若草 賭射 野遊 雉 雲雀 遊糸 春曙 遲日 志賀山越 三月三日 蛙 残春

夏十首（以下、最初と最後の題のみ示す）

新樹……蟬

秋十五首

残暑……暮秋

冬十首

落葉……仏名

恋五十首

初恋……寄商人恋

作者

左

女房 後京極号女房 從三位藤原朝臣季経左京大夫頭輔孫 清季息

正四位下行左近衛権中将藤原朝臣兼宗 從四位上藤原朝臣有家

從四位下行左近衛権少将藤原朝臣定家 阿闍梨頭昭

右

從二位左近衛権中将兼中宮権大夫藤原朝臣家房

從三位藤原朝臣経家頭輔孫 重家息 正四位下行右京権大夫藤原朝臣隆信

従五位上藤原朝臣家隆 従五位下源朝臣信定

沙弥寂蓮

講師

読師

判者 入道従三位皇太后宮大夫藤原朝臣俊成法名釈阿

春

元日宴……残春

夏

新樹……蟬

一番 春上 元日宴

左持

一 新玉あらとの年としを雲居みに迎むかふとて今日けふ諸人もろに御酒賜みきたまふなり

女房

右

二 百敷も、しきや春はるを迎むかふる盃さかづきに君きみが千年とせのかげぞ映うつれる

信定

(判詞略)

以下、順に小西本と校合して勝負、作者を中心に両本の主な相違を見ていくこととしたい。

春上

一番 右の作者名が「従二位信定」と記されているが、小西本では「信定」とのみ書かれている。作者名表記が以下も小西本と異なる。

六番 左歌に異本との校合がある（「御階のきはにもとにイ」）。以下もところどころ見られる。

十番 右 信定（小西本 隆信朝臣）

十八番 右 経家（小西本 信定）

二十一番が二十番と誤記されている。

夏下

題で最初に五つ並べて題を書くところにおいて「晩立」とあるべきところを、「晩立」と離して書かれており、一見別々の二題のごとくに見える。

同様に秋中の題で最初に五つ並べて題を書くところにおいて「広沢池眺望」とあるべきところを、「広沢池眺望」と離して書かれており、別々の二題のごとくに見える。

秋下

三番 判詞からして「右勝」とあるべきところ「勝」の字が欠落している。（小西本 右勝）

九番 判詞からして「左持」とあるべきところ「左勝」と記す。（小西本 左持）

冬上

題で最初に五つ並べて題を書くところにおいて「野行幸」とあるべきところを、「野行幸」と離して書かれており、別々の二題のごとく見える。

十二番 判詞からして「右勝」とあるべきところ「勝」の字が欠落している。（小西本 右勝）

十八番 左歌の作者名が欠落している。(小西本 兼宗朝臣)  
冬下

七番 「寒松」の題名が欠落している。(小西本 「七番 寒松」)

十八番 判詞からして「右<sub>勝</sub>」とあるべきところ「勝」の字が欠落している。(小西本 右勝)

恋一

十二番 判詞からして「左<sub>勝</sub>」とあるべきところ「左<sub>持</sub>」と記す。(小西本 左勝)

廿二番 左<sub>持</sub> (判詞からすれば「持」であるが、小西本は「左勝」と記す)

恋二

七番 「契恋」の題名が欠落している。(小西本 「七番 契恋」)

恋三

廿四番 判詞からして「右<sub>勝</sub>」とあるべきところ「勝」の字が欠落している。(小西本 右勝)

廿六番 判詞からして「左<sub>持</sub>」とあるべきところ「左<sub>勝</sub>」と記す。(小西本 左持)

また、歌のみが左と右とで入れ替わっている。

恋七・八・九

恋一・六・十は最初にその部の題(五題)全部を記し、次いで「一番 初恋」(恋一)のごとく記しているが、恋七・九においては、その部の題(五題)全部の記載を省略し、「恋七 一番 寄山恋」のごとく初めている。(小西本においては恋六・十が、その部の題(五題)全部の記載を省略している。)

後藤 重郎

高橋万希子







四、本文三



五、本文四

## 六歌抄(上下)

### 一、書誌

本書は室町中期の書写にかかる卷子本二軸である(写真六)。桐箱入、蓋は縦三〇・〇糎、横一九・二糎、高さ二・五糎の印籠蓋。身は縦三〇・〇糎、横一九・二糎、高さ九・五糎(八・五糎)。蓋表(写真七)に、

牡丹花老人書

六家抄

二卷

極札<sup>并</sup>吟味書添

と記す。蓋裏(写真七)には、

この六家抄は牡丹花肖柏か自筆也

六家集より得意の秀逸をみつから撰

抄せしものなれはことにめつらしと

先公珍襲し給ひ<sup>是</sup>き御遺愛の一つなり

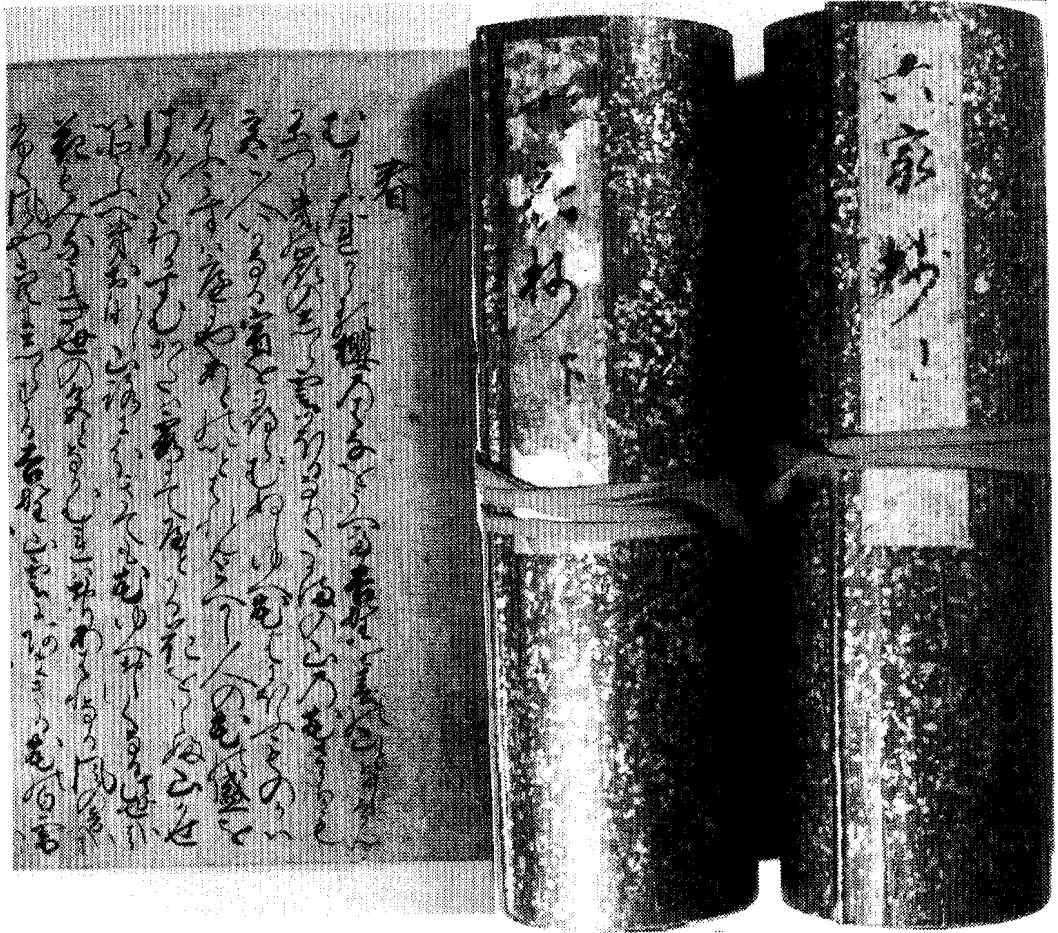
田内親輔謹識

と記す。身の下側に貼紙をして、

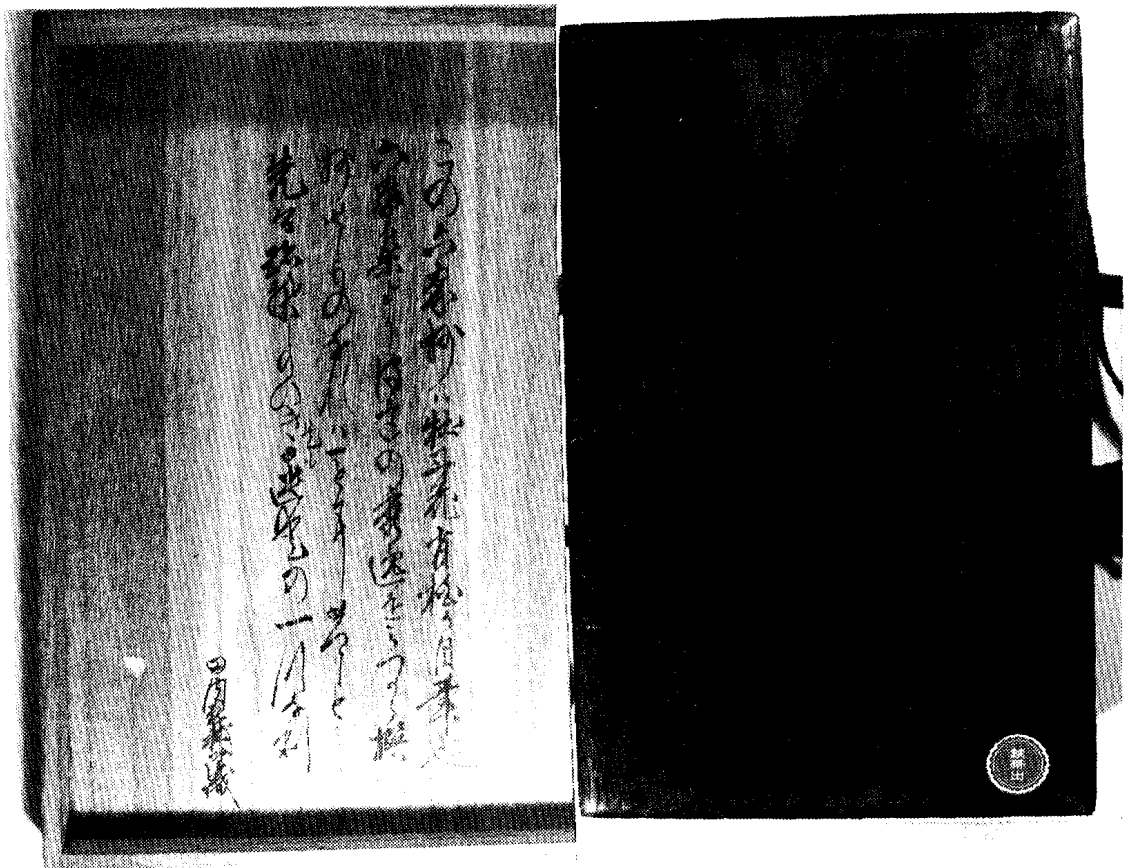
牡丹花肖柏

六家抄

と記す。この身には紐が付けられている。



六、六家抄上・下巻 本文



七、桐箱(蓋表・裏)

本書はもと楮紙袋綴二冊本（上巻六五丁、下巻六一丁）を卷子本に改めたものであり、表紙は上巻、縦二六・八糎、横二九・五糎、下巻、縦二七・〇糎、横三一・〇糎、上下巻共に紺紙金砂子散らしとなる。見返しは金箔。題簽は縦一五・一糎、横四・〇糎、表紙の左上に貼布されており、

六家抄<sup>上(下)</sup>

と記す（写真六）。料紙は巻首・巻末には礼紙を用い、全面に裏打ちが施されている。

上巻は全長一九五四・九糎（箱の中にある墨書の紙には六十六尺とある）で、一一七葉の紙が継いである。継紙は縦二六・八糎、横一八・三糎が一葉分であるが、もと冊子本を卷子本に改装したため各抄の終り、次の抄の初めに切継ぎによる寸詰りの箇所がある。上巻の長さの詳細は次の如くである。

礼紙 一一・五糎

月清抄春 一〇九・八糎

拾玉抄 七九・二糎

長秋抄 六三・九糎

山家抄 六三・一糎

拾遺抄 一八七・七糎

壬二抄 一五二・九糎

月清抄夏 三八・五糎

拾玉抄 八六・五糎

長秋抄 三四・五糎

山家抄	一五・三糎
拾遺抄	七八・一糎
壬二抄	五七・〇糎
月清抄秋	一四四・八糎
拾玉抄	一九九・三糎
長秋抄	七五・九糎
山家抄	六五・九糎
拾遺抄	二六三・九糎
壬二抄	二〇一・三糎
礼紙	二五・八糎

上卷には、春、夏、秋の部があり、それぞれに月清抄、拾玉抄、長秋抄、山家抄、拾遺抄、壬二抄の順で歌が配されている。歌は一葉に一二首、一首一行書で合計一二二八首（箱の中にある墨書の紙には一一二八首とあり）が漢字平仮名交りで記されている。次に各部各抄の歌数を掲げる。それにつき、歌数について墨書された紙一葉が箱の中にあるので、その歌数も括弧を付けて示しておく。

月清抄春	六九	(六九)
拾玉抄	五一	(五一)
長秋抄	四一	(四一)
山家抄	四〇	(四〇)

拾遺抄	一二二	(一二二)
壬二抄	九九	(九九)
月清抄夏	二三	(二三)
拾玉抄	五五	(五五)
長秋抄	二一	(八〇)
山家抄	九	(記載なし)
拾遺抄	五〇	(記載なし)
壬二抄	三六	(三六)
月清抄秋	九三	(九三)
拾玉抄	一三〇	(一三〇)
長秋抄	四八	(四八)
山家抄	四二	(四二)
拾遺抄	一七〇	(一七〇)
壬二抄	一二九	(一二九)

下巻は全長一七九〇・八糎(箱の中にある墨書の紙には六〇尺とあり)で、一一三葉の紙が継いである。継紙の大きさは上巻同様、縦二六・八糎、横一八・三糎が一葉分であり、切継ぎによる寸詰りの箇所を有するのも上巻と同じである。下巻の長さの詳細は次の如くである。

礼紙 一一・〇糎

月清抄冬	七一・八	糲
拾玉抄	五九・〇	糲
長秋抄	三〇・五	糲
山家抄	三四・二	糲
拾遺抄	一〇八・八	糲
壬二抄	一二四・六	糲
月清抄恋	五三・一	糲
拾玉抄	七五・一	糲
長秋抄	四九・三	糲
山家抄	四三・五	糲
拾遺抄	一五五・七	糲
壬二抄	一五三・六	糲
月清抄雜	一四七・九	糲
拾玉抄	一八三・九	糲
長秋抄	六四・三	糲
山家抄	七九・五	糲
拾遺抄	一八四・四	糲
壬二抄	一二一・六	糲

奥書 一五・五糶  
遊紙 二三・五糶

下巻には、冬、恋、雑の部があり、それぞれに上巻同様、月清抄、拾玉抄、長秋抄、山家抄、拾遺抄、壬二抄の順で歌が配されている。歌は一葉に一二首、一首一行書で合計一一一八首（箱の中にある墨書の紙には一一一七首とあり）が漢字平仮名交りで記されている。これらの形式は上巻と同じである。次に各部各抄の歌数を掲げる。それにつき、これも上巻同様、箱の中にある墨書の紙に記されている歌数も括弧を付けて示しておく。

月清抄冬	四五	(四三)
拾玉抄	三八	(三八)
長秋抄	一九	(一九)
山家抄	二一	(二二)
拾遺抄	七一	(七一)
壬二抄	八一	(八一)
月清抄恋	三三	(三三)
拾玉抄	四八	(四八)
長秋抄	三三	(三三)
山家抄	二八	(二八)
拾遺抄	一〇一	(一〇一)
壬二抄	一〇〇	(一〇〇)

八、奥書





月清抄雜 九五

(書名歌数  
記載なし)

拾玉抄 一一九

(一一九)

長秋抄 四一

(九二)

山家抄 五一

(書名歌数  
記載なし)

拾遺抄 一一六

(一一六)

壬二抄 七九

(七七)

奥書(写真八)は、

右兩冊愚老令抄出也加校合

早

牡丹花

(花押)

とある。

書付(写真九)には、

牡丹花

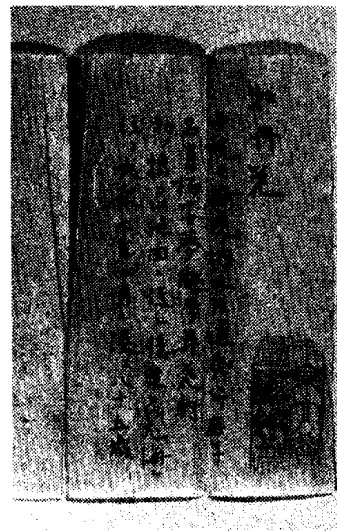
中院十輪院内大臣通秀公ノ庶子

名肖柏字夢庵号弄花軒

初メ撰州池田ニ住シ後泉州左海ニ

住ス大永七年四月ニ歿ス八十五歳

九、書付



十、極札



と記されている。

箱の中に極札（写真十）あり。外包の表には、

牡丹花筆六家抄極札<sub>并</sub>書付

と記され、内包の表には、

牛庵極札一枚

古筆家吟味書付 一枚

了意書入也

と記されている。極札の表には、

六家抄

<sub>上下</sub>  
奥書牡丹花真跡

牛庵（朱印）

と記されている。その他、上下巻ごとに卷子の全長、各部各抄別の歌数、合計歌数を記した墨書の紙一葉（この紙の記載事項については「箱の中にある墨書の紙」として、関係箇所に掲げておいた。）と、肖柏について解説をしたペン書きの紙一葉が、箱の中に収められている。

## 二、本文

現在、『六家抄』の本文として活字化されている『中世の文学 六家抄』（底本、東京大学国文研究室蔵宗訊筆肖柏奥書本）と本書とを対校し、歌の出入、順序の異同、その他が認められる箇所を以下掲げることにする。

### I 『中世の文学 六家抄』には収載されていない歌

ここでは、『中世の文学 六家抄』にはない歌と、その歌が配されている位置を記しておきたい。また『中世の文

学 六歌抄』には、底本とした東京大学国文研究室蔵宗訊筆肖柏奥書本に収載されていない歌を、天理図書館蔵『古六家集』・慶応大学図書館蔵『月清抄』によって補遺として加えられている。補遺に加えられている歌の中に、本書の歌が認められる場合は、その歌を補遺の歌に付されている歌番号（括弧つきで）と共に示しておく。

〔上巻〕

(1) 長秋抄春 一三二番の次に一首あり。

(2355) ちる花をおしむにつけて春風の吹やるかたになかめをそする

(2) 長秋抄春 一四九番の次に一首あり。

(2368) 八重霞八十嶋かけてたちにけり千代のはしめの春の曙

(2356) ますらおか秋のをしねを松かきにまた春ふかき鳥の声哉

(2357) いつしかと霞の衣たちかけてみもすそ川も氷とけ行

(2358) さ、浪やしかのはま松ふりにけりたか世にひける子日なるらん

(2359) 明石かたゑしまをかけてかすめとも霞のうへもおきつしら波

(2361) 山さくらちりに光をやはらけて此世にさける花にやあるらん

(2362) 何となくおもひそをくる帰かりことつてやらん人はなけれど

(2364) いにしへの籬の野らのつほ堇昔こひてや露けかるらん

(2365) こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひをまはらなりとや

(2366) あはれともうしともおもふ藤の花なとかしつえにわれをなしけん

(2367) 桜ちり春のくれ行物おもひも忘れぬへき山吹の花

- (3) 長秋抄夏 四九一番の次に一首あり。  
(2369) 昔おもふ草のいほりのよるの雨に涙なそへそ山ほと、きす
- (4) 長秋抄夏 四九二番の次に一首あり。  
(2370) 雨そ、くはな橋に風過て山ほと、きす雲に鳴なり
- (5) 長秋抄夏 四九七番の次に一首あり。  
(2371) 尋みむまほろしもかな郭公行ゑもしらぬみな月の空
- (6) 長秋抄夏 四九八番の次に一首あり。  
(2372) さみたれはたくもの煙うちしめりしほたれまさるすまのうら人
- (7) 長秋抄夏 四九九番の次に五首あり。  
(2373) いかなれは雲間もみえぬ五月雨にさらしそふらん布引の滝  
(2375) けふも又めつらしきかなも、しきや雲のうへ人衣かへして  
(2376) すみ染の袖はよそなる花の色を人のためにも猶おしむかな  
(2377) 蛙なくかひ屋にたつる夕けふりしつのはわさも心すみけり  
(2378) 野へにをくおなし露ともみえぬかなはすのうき葉にやとる白玉
- (8) 月清抄秋 六四六番の次に一首あり。  
(2379) しくれつる外山の雲ははれにけり夕日にそむる峯のもみちは
- (9) 月清抄秋 七一〇番の次に一首あり。  
(2381) なにゆへとおもひもわかぬたもとかなむなしき空の秋の夕暮

(10) 月清抄秋 七二二番の次に一首あり。

(2382) みすしらぬむかしの人の心まで嵐にこもる夕ぐれの空

(11) 月清抄秋 七二四番の次に二首あり。

(2383) 風のをとはあしの丸屋にしくれきてあらぬ雲しく秋の小山田

(2384) かせふけは玉ちる野へにおれふしてまくら露けきをみなへしかな

(12) 長秋抄秋 八七四番の次に一首あり。

(2388) かへりては又くるかりよこと、はんをのかとこよもかくやすみうき

(13) 長秋抄秋 八八八番の次に一首あり。

(2385) 嵐ふく嶺のもみちの日にそへてもろく成行わか涙かな

(14) 長秋抄秋 九〇五番の次に二首あり。

(2386) 七夕のあふ夜の空のふくるにそ秋の心はくたけそめける

(2387) 秋ふかきうら吹かせに伊勢嶋やあまのとまやも衣うつなり

〔下巻〕

(15) 長秋抄冬 一三三四番の次に二首あり。

(2389) 月きよみ千鳥鳴なりおきつ風ふけるの浦の明かたの空

(2390) 風さゆるさよのね覚のさひしきははたれ霜ふりたつさはになく

(16) 長秋抄冬 一三三八番の次に一首あり。

(2391) あはれにも夜はにすくなる時雨かななれもや旅の空にいてつる

(17) 長秋抄冬 一三四二番の次に三首あり。

(2392) 冬の池のあしの枯はのみたれこそ鳩のうきすのたより也けれ

(2393) いせの海きよき渚になく千鳥こゑもさえたる有明の空

(2394) 風さむみかりはのをを朝ふめは忍もちすり霰ちりかふ

(18) 長秋抄雜 二〇六五番の次に一首あり。

(2395) 世をすて、入にしみちのことはそ哀もふかき色はみえける

(19) 長秋抄雜 二〇九五番の次に八首あり。

(2396) いつとても有明かたは露けきをなをかきりなし長月の空

(2397) たのむかな我立柚と祈をきて山のかひある峯のけしきを

(2398) 月を見て千里のほかを思にも心そかよふ白河の関

(2399) かりそめの旅の別と忍ふれと老は涙もえこそと、めね

(2400) まろふしの柴のしきゐに露そをくよや深ぬらんさやの中山

(2401) かきすつるあまのもしほの草枕心そとまるわかのうら風

(2403) 暮をまつ朝の露もかたき世になをさためなしのへの秋かせ

(2402) 君か代は千世ともさ、し天の戸やいつる月日のかきりなけれは

II 『中世の文学 六家抄』にある歌で、本書に収載されていない歌。

〔上巻〕

(1) 壬二抄春 五九六番

あやめ草みどりにくもる軒ばより先もりそむる夕月夜かな

(2) 月清抄秋 六五三番（紙最初）

外山より鹿の音をくる秋風にこたへておつる萩の下露

から、月清抄秋 六九九番（紙最後）

ふか、らぬ外山の庵のね覚だにさぞな木のまの月はさびしき

までの四葉分四七首なし（歌略）。

(3) 拾玉抄秋 八五四番

大たけのすゞふく風に霧晴て鏡の山に月ぞくもらぬ

〔下巻〕

(4) 壬二抄冬 一五一六番

そむけつるかべには影もきえつきてほのかに残るよひの埋火

(5) 壬二抄恋 一八四七番

うつりゆく人の心の花ゆへもよしの、山に身をやまかせん

(6) 拾玉抄雜 二〇三〇番

になひもつぎうきのいれこまちあしだ世を行道の物とこそ見れ

Ⅲ 『中世の文学 六家抄』と配列の位置が異なる歌。

〔上巻〕

(1) 月清抄春 一〇番と一一番の間に六九番あり。（六九番があつた位置は当然のことながら六八番・七〇番となる

がそれについては省略する。以下も同じ)

10 高砂の尾上の花に春暮て残し松のまかひ行かな

69 桜さく比良の山かせ吹まゝに花になり行しかのうら波

11 山さとのそとも岡のほとなきをはるかにみする朝霞哉

(2) 拾玉抄春 八二番と八三番の間に一二〇番あり

82 わか門を尋てもみよ春のくるしるしの杉は青柳の糸

120 花のえにかけて数そふまりの音のなつまぬ程に雨そゝく也

83 なさけありてあつまのかたへ別にし人にたかはぬ春のくれかな

(3) 拾遺抄春 三〇五番と三〇六番の間に三一一番あり。

305 つり舟の里のしるへもこと遠し八十嶋かすむ明ほのゝ空

311 さもあらぬ草葉も春はみなれけりさわらひあさる山の便に

306 山人のゆくての蕨手にためてしはしそやすむ谷のほとりに

(4) 壬二抄春 三二七番と三二八番の間に四一〇番あり。

327 けふみれは雲も桜にうつもれて霞かねたるみよしのゝ山

410 みよしのゝよしのゝ嶺もさくら花さきぬる程の雲はかゝらし

328 久堅のひかりのとかにさくら花ちらてそにほふ春の山かせ

(5) 壬二抄春 三四八番と三四九番の間に三五六番あり。

348 たをやめの春たつけふの衣よりにほひそめたる花の色かな



356 たか中に遠さかり行玉章のはては絶ぬる春のかりかね

349 かつらきやたかまの嵐吹ぬらし空にしらるゝ花の白雪

(6) 長秋抄夏 四九〇番と四九一番の間に五〇〇番あり。

490 さらぬたにふす程もなき夏のにまたれてもなく郭公哉

500 まつとしも今はなけれと郭公なれし心の空にもあるかな

491 けふは又あやめのねさへかけそへてみたれそまさる袖の白玉

(7) 壬二抄夏 五九〇番と五九一番の間に五九五番あり。

590 夏のよは杉のねくらの程もなく鳴ねはかなき朝からす哉

595 むは玉の夜はあけぬらし足曳の山ほとゝきす一聲の空

591 さゝ竹の大宮人のふしのまもみしかくあくさほの山のは

(8) 月清抄秋 六三〇番と六三一番の間に一八五六番あり。但し、一八五六番の位置にもあり、重出。

630 故郷はあさちか末になりはてゝ月にのこれる人のおもかけ

1856 わか宿は野ちのさゝはらかき分てうちぬるしたにたえぬ白露

631 秋のよに竹うちそよくかせの音よ花ありとてもいとほさらまし

(9) 拾玉抄秋 七六一番と七六二番の間に八五五番あり。

761 よしの河岩にせかれてちる玉をみかくは月のひかりなりけり

855 照月の光とともに流きて音さへすめる山川の水

762 七夕の待とるけふのおもひより秋のあはれは夕くれの空

(10) 拾遺抄秋 一〇九六番と一〇九七番の間に一一一七番あり。

1096 みよし野は雪ふる嶺のちかければ秋よりうつむ月の下草

1117 たひ衣ひもとく花の色くもとを里をの、あらた朝きり

1097 まくすはふ生田の野への秋かせにやかて色つく袖のうへかな

(11) 拾遺抄秋 一一〇五番と一一〇六番の間に一一一六番あり。

1105 はしたかをてならしそむる風たちて秋のあふきそ遠さかり行

1116 はし鷹やならすかりはに日はくれて草の枕も花の色く

1106 大空の月こそこれ住なれし人の影みぬ軒の草葉に

(12) 壬二抄秋 一二四二番と一二四三番の間に一二四六番あり。

1242 宮きの、野もりか庵にうつ衣萩か花すり露や染らん

1246 むしのねも涙露けき夕くれにとふ人とは萩の上風

1243 こすさほのしつくも色はかはりけり紅葉におつるうちの河長

〔下巻〕

(13) 山家抄冬 一三六二番と一三六三番の順序が逆となる。

1363 せとわたるたな、し小舟心せよ霰みたれてしまきよこきる

1362 むかし思庭にうき木をつみをきてみし世にもにぬ年の暮かな

(14) 壬二抄冬 一四九七番以降一五〇一番までの順序が、1497、1499、1500、1498、1501となる。

1497 よをかさねしほつすかうら雪つもり山こす駒の跡やたえぬる

- 1499 いて、くる衣てさむき河風におもひかねたるをしのこゑかな  
1500 おく山の柴のいほりもいつまでかふるや霰の世にもあられん  
1498 かねの音に今や明ぬとなかむれはなを雲深し峯の白雪  
1501 ふ、きするこしの大山こえなやみ日影もみえす暮る空哉
- (15) 壬二抄冬 一五〇八番と一五〇九番の間に一五一四番あり。  
1508 雪つもる峯の山寺みちたえて軒はのしきみ本つはもなし  
1514 しら雲もひとつにさえてむさし野の雪よりをちは山のはもなし  
1509 夕月夜よしの、里にふる雪のつもりて残る有明のかけ
- (16) 長秋抄恋 一六一七番の次に壬二抄雜 二二七四番から二二八五番までの一葉分二二首がある。  
1617 忘など契し宿はいか、あらん野にも山にもおもかけそたつ  
2274 すみの江や月に神代のこと、へは松のこすゑに秋風そ吹  
(二二七五番から二二八四番までの十首略)
- 2285 竜田姫みわの松原の白露にをるおやかさしの玉そみたる、  
(17) 拾遺抄恋 一六五三番と一六五四番の順序が逆となる。  
1654 ぬの引の滝より外にぬきみたりまなく玉ちる床の上哉  
1653 うつるなりよしさてさらはなからへよさのみあたる君か名もおし
- (18) 拾遺抄恋 一六六七番と一六六八番の順序が逆となる。  
1668 誰ゆへとさらぬ旅ねの庵たに都のかたはななめし物を

1667 ふたみかたいせの浜萩しきたへの衣てかれて夢もむすはす

(19) 拾遺抄恋 一七一五番と一七一六番の順序が逆となる。

1716 やとりこしたもとは夢かとはかりにあらはあふ世のよその月影

1715 たのむ夜の木のまの月もうつろひぬ心の秋の色をうらみて

(20) 壬二抄恋 一七六九番と一七七〇番の間に一八四五番あり。

1769 名とり河こゝろのとは、埋木の下行浪のいかゝこたへむ

1845 山河の紅葉にまじる水のあはの色にいて、も消やわたらん

1770 なにとなく我ゆへぬれし袖の上はあさかりけりと月やみるらん

(21) 壬二抄恋 一七七四番と一七七五番の間に一八四六番あり。

1774 よそに見ていく夜になりぬ久かたの空行月におもふ心は

1846 なけかしよかへるたもとにまさりけりくれをもまたぬ花の下露

1775 もとあらのこ萩か露を枕にて夢にも人をみやきの、はら

(22) 山家抄雑 二二〇一番と二二〇二番の間に二二〇七番あり。

2101 いにしへをなに、つけてか思いてん月さへかはる世ならましかは

2107 花ならぬことのはなれとをのつから色もやあると君ひろはなん

2102 今よりはむかしかたりは心せむあやしきまでに袖しほれけり

(23) 拾遺抄雑 二二〇一番と二二〇二番の順序が逆となる。

2202 天の原ふしのしは山しはらくも煙たえせず雪もけなくに

2201 たらちねのをよはす遠き跡過て道をきはむるわかのうら人

(24) 拾遺抄雜 二二五三番と二二五四番の間に二二六二番あり。

2253 あくかる、心ひとつそさしこめぬ真木のいた戸の明くる、空

2262 心とてわか物かほにたためともつゐの栖の行衛やはしる

2254 のこる松かはる本草の色ならて過る月日もしらぬやと哉

(25) 壬二抄雜 二二二九番から二二三四番までの順序が、2329、2331、2332、2333、2330、2334、となる。

2329 おほかたの秋のね覚の長夜も君をそいのる身を思とて

2331 その山と契らぬ月も秋風もす、むる袖に露こほれつ、

2332 はかなくもけふのいのちをたのみ哉昨日を過し心ならひに

2333 いくとせの老のなみたまみつしほのあした夕に身をうらむらん

2330 わかのうらやおきつしほあひにうかひ出る哀我身のよるへしらせよ

2334 鐘のをとも窓うつ雨もほのかにて枕に深き長夜のやみ

#### IV その他

(1) 拾玉抄雜 二〇六五番（西行の歌）、『中世の文学 六歌抄』では見せ消ちとなり、本書は所載なし。

2065 花ならぬことの葉なれどおのづから色もやあると君ひろはなん

(2) 壬二抄雜 二二六六番、『中世の文学 六歌抄』ではへが付されているが、本書では第四句まで立線にて見せ消ちとする（立線歌の中央に引かれているが、左傍線にて示す）。

2266 へ月もいかに須まの関守ながむらん夢は千鳥のこゑにまかせて

(2266)  
月もいかにすまの関もりなかむらん夢は千鳥の声にまかせて

後藤 重郎  
村井 俊司